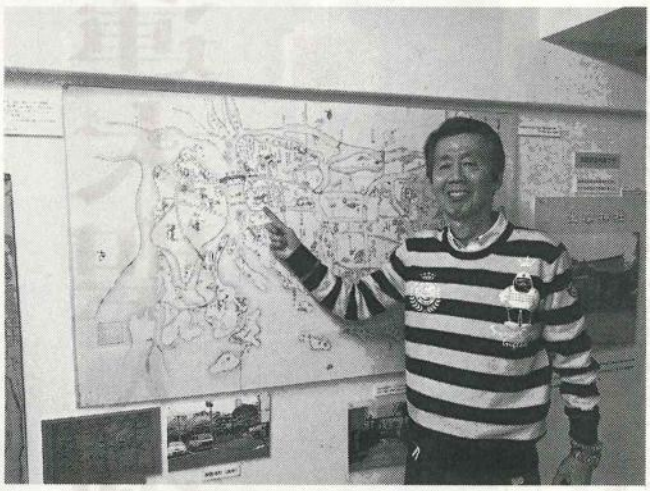
法藏館

シリーズ『宗教と差別』監修者

浪速地区歴史展示室 浅居明彦室長に聞く



古地図を前に部落の歴史を解説する浅居氏

「浪速生まれ、浪速育ちの浅居です」

そう胸を張って話し出したのが、大阪市浪速区のJR芦原橋駅ガード下にある「浪速地区歴史展示室」の浅居明彦室長（64）だ。芦原橋駅の南側には日本でも最大級の被差別部落があり、現在は「太鼓の町」として地域おこしをしている。この地域おこしの立役者でもある浅居氏は、部落解放同盟浪速支部長も務めた長年の人権活動家。法藏館から刊行が始まったシリーズ『宗教と差別』（全4巻）の監修者でもある。

「私の母は滋賀県の被差別部落の出身、父親はその親の代に和歌山県の被差別部落から出て来ました。それで中学1年生の時に両親が離婚。浅居というのは母方の姓です」。その両親は「寝た子を起こすな、部落、部落と言うから差別がなくならんと考える人だった」。したがって、自分が被差別部落にルーツを持つことも、地域が被差別部落ということも知らずに育った。部落の中の小学校に進学。後年、この学校が皮革産業で生活した被差別部落の人々の喜捨で建てられ、土地も建物も大阪市に寄付されたことを知るが、もちろん当時は知る由もない。

知ったのは中学1年生の時。教師が人権副読本『にんげん』を読み、部落差別の苦しみ、人間の平等の大切さを語っていた。「なんや、部落の人って可哀想やな、何も悪いことをしてないのにエタとか言われて。こんな不合理なことあるかいな」と正義感をみなぎらせた。すると教師が「実はこの学校にもそういう人の仲間がいる」と告げた。

「誰だ、そんな可哀想な奴は、と思ってキョロキョロ周りを見渡していたのは、同じ小学校の連中だけ」。他の小学校出身者は、誰が被差別部落の出身なのか、親から聞いて知っていたのだ。「自分がそういう可哀想な側の人間にはなりとうないという思いがあった」と、ショックは大きかった。

差別戒名墓石（レプリカ）

親世代から続く差別を体験

"差別はゆりかごから墓場まで"

差別への怒り

「家に帰って玄関に出てきた母親に、なんで俺をこんな星の下に生んだんじゃ！と言ったら、母親はくるっと踵を返してね。それ以上は何も言えなかった」。母からは、子どもの頃に闇の中から石と差別語を投げつけられたため集団下校したことなど、いくつもの被差別体験を聞いた。差別への怒りが心頭に発した。

高校卒業後、20歳で部落解放同盟の専従職員になり、数々の部落解放闘争に参加した。近年では大阪人権博物館「リバティおおさか」（母校の小学校の跡地にあった）の立ち退き反対裁判の事務局長を務めた。

古文書・古地図を丹念に分析しての部落史研究はライフワークであり、浪速地区歴史展示室でも新事実や新発見が展示されている。自由民権家の中江兆民が第1回総選挙（1890年）に当選した際には、浪速地区の浄土真宗本願寺派正宣寺の横川峰月、さらに横川の教化を受けた被差別部落の人々が大きな役割を果たしたことなど、重要な知見を与えてくれる。

「お坊さんに見てほしいのはこれ」と浅居氏が指し示したのは、「革門」「畜門」などの文字が掘られた墓石のレプリカ。差別戒名である。「私は、日本はゆりかごから墓場まで差別だ、と言ったことがあります。ひどい話じゃないですか。部落の人は苦しい生活の中でお寺に来て、死んでようやく極楽に行けると思って、戒名をもらって有難い有難いと言って手を合わせて、それで字を知らんばっかりにこんな差別を受けていたことに気づけなかった」

仏教界が犯してきた過ちに向き合うことも、水平社100年の今こそ必要なことだろう。

★

『シリーズ宗教と差別』は国際日本文化研究センター科研費プロジェクト「人権と差別をめぐる比較宗教史」の研究成果。浅居氏は磯前順一研究代表、吉村智博氏（大阪公立大学特別研究員）と共に監修者に名を連ねる。吉村氏とは旧知の仲で、磯前氏とは数年前にリバティおおさかでの学習会で知り合った。科研費プロジェクトには「当事者の思いや意見がそこで出なければ意味がない」と誘いを受け参加。本シリーズは被差別の現場と学問を繋ぐ結節点にもなったわけだ。

天皇制、イスラエル問題、迷信の民俗学、ネット右翼、福島原発事故避難者などさまざまな「宗教と差別」を取り扱う。第3巻『差別の地域史―渡辺村からみた日本社会』（7月刊行）は、浅居氏の地元・浪速部落の歴史を扱った内容で、浅居氏と磯前氏の対談も収録する。

既刊の第1巻『差別の構造と国民国家―宗教と公共性』は第1部「差別と国民国家―理論的考察」、第2部「差別と共生―世界の事例から」、第3部「差別の構造―近代日本の事例から」の3部11章及び序章・最終章で構成。（A5判・324頁・価3080円）